

## 【学会の国際化と学術大会のあり方について】

学会の国際化促進は、科学、技術の分野でひろく行われている。日本放射線技術学会も国際化を目指し、春の大会から英語のプレゼンテーションが推奨された。今回のスタンフォード海外研修を経験し、国によって医療制度や教育体制の違いはあるが、日本の放射線技術が世界に通用するのだということを実感した。しかし、日本で開催される学会が英語になると、学会への参加人数が減少するのではないだろうか。少なくとも筆者が勤務する地方病院のように英語と縁がないところで日常業務を行っている者にとって学会の国際化は敷居の高いものとなる。日頃の業務で気づいた臨床に直接役に立つ技術をまとめる機会が減ってしまうことは、モチベーション低下にもつながるかもしれない。われわれ診療放射線技師の仕事は、複雑化してきている医療の現場のなかでも日々めまぐるしく変化している分野である。自ら情報収集をすることや日頃の検査の裏づけを得るための検証は欠かせない作業であり、臨床的に意義のある研究活動を深めることによって、最先端の技術を患者さんに提供することが可能となる。これらを含めて、多くの職種とディスカッションする場が学会であり、放射線技術に携わる者全員が参加できる場であるからこそ意味があると考えます。

学会発表のレベルアップをさらに図ることは、今後、世界に日本の技術を発信するために必要である。今回の研修を通し、日本だけではなく海外へ視野を広げることにより、放射線技術者としての専門性を高めることができるのだと感じた。さらに国境を超えた労働環境が違う同業者とディスカッションすることで新しい知見や発見が見いだせるであろう。しかし、研究者のための学会であってはならないと考える。学会費の価値が学会員全員にあるように、還元するサービスの充実も重要である。少しでも多くの会員に様々な経験をしていただくため、親会と部会の棲み分けを明らかにし、統一した規格を作るなどして部会の格差をなくし、国際化を目指した教育体制の整備を行ったうえで、学術大会の一部で国際化を行うなど、より多くの技術を世界へ発信できるような仕組みを整えるべきである。

## 【研修で得たことを今後どのように生かすか】

最先端の画像診断機器によって得られた情報が臨床的評価を加味した実用的な医療を知るため、この研修に参加させていただいた。スタンフォード大学で行われている技術研究で、近い将来臨床応用される molecular imaging, 低侵襲で正確な腫瘍の ablation や痛み緩和などを行える MR-guided High Intensity Focused Ultrasound(HIFU)など様々な技術の可能性を目の当たりにした。特に High-field MRI である 7tesla においては、高分解能、高 SNR が実現することにより、人間の認識行動をも評価できる可能性があることには大変興味があった。このような技術をどのように活用するかを考え、新しい技術を科学して確立し、臨床へ応用することは放射線技術者の使命であることを再認識した。新しい技術が臨床応用されたとき、日常業務や研究活動に取り入れて患者さんに還元できるよう、日々精進したい。

また、研究、発表などで学会参加をするごとに大切な仲間が増えていくのも実感している。今回の研修でも、多忙な日常業務をこなしながら自己研鑽を欠かささない仲間たちの話を聞き、自分の仕事に対する姿勢を正して視野を広げることができた。筆者は、地方病院の一放射線技師であり、まだまだ勉強中の身ではあるが、この職業について誇りに思うことが出来、次世代につなげる何かができるのではないかと考えた。モチベーションの高い仲間たちとの将来の関わりも楽しみなところであり、一人でも多くの会員にそのような体験をしていただきたい。

今後もこのような研修を通じ、後進の教育や自身のレベルアップだけではなく、放射線技師として社会に貢献していくための糧とし、世界を目指したい。

最後に、本研修にご尽力いただいた日本放射線技術学会、スタンフォード大学、GEHC-J スタッフ、アドバイスくださったスタンフォード OB 会の方々、引率していただいた金沢大学田中利恵先生、そして本研修に快く送り出していただいた市立函館病院諸兄に感謝いたします。また、参加を後押しくださった北海道大学院坂田元道准教授に深謝いたします。



講義の合間の coffee break 中(筆者前列中央左)